史料

日見峠の今昔

長崎縣土木課

一　舊幕時代の長崎と日見峠

元龜元年『西暦一五七一年、三百五十年前』葡萄牙の一商船が始めて此の西陲の一角鶴の港の門戸を叩ひたのであつた。

當時歐州を風靡した重商主義と殖民政策とに基いて領土及物質の獲得並天主教傳道の目的に向つて驀進しつゝあつた葡萄牙、西班牙の兩國は時を遷さず此の開放せられたる東洋の一角に向つて其の鋒先を進めたのである。

靜けき長夜の夢から呼び覺まされた瓊の浦和の人達は傀偉な黑鐵の船のいかみあふが如き礮き一時は戰きもしたがそれは束の間で馴致から歡喜へと融け合ふ崎湯の天地は美しい脚色の劇場と化したのである。

其處にはギヤマンサルビ天鵞絨羅紗等異邦の香高き幾多

珍奇なる品は山と積まれたそは物質の上にのみには止まらなかつた。

名ある學者、文人、商賈、工匠の來り住むもの數ふるに遑なき程であつた。

斯くて文物並び整ひ互に其の香を競ひ當時本邦文明の精華は此の西陲の一角に繚亂として咲き誇つたのである。

開港當時の長崎の繁榮は到底筆舌の盡し得る所ではなかつた。

憧がれの眸を輝かしつゝ長崎に來るもの踵を接するの有樣であつたことは寧ろ當然であつた。

當時長崎と江戸上方方面との通路は幾筋かを數へ得たか舟揖の便を籍らずしては只一路此の日見峠を越ゆるにあるのみであつた。

當時此の峠は彼の行役日記にも『坂甚だ急峻馬に乘ること難し』と記されてある通り極めての難路で行人を惱ました事は到底も一通りではなかつたそれでも人々の多くは此の街道に據つたのである。

それは、只海の波路を怖るゝと言ふ事の外に更に次の如き『デリケート』な『ローマンス』が謎の樣に祕められてゐた。

長崎を後に鹿島立つ旅人たちの期待として其處の日の出の雄大と壯嚴を拜し『毎年入朔の節句には近鄕近在の人々此の峠に集り來りて日の出の壯嚴を拜したりと言ふ日見の名も之等に源を發せしとも言ふ』はるけき首途のつゝがなきやう祈願する爲であつた。

更にこの峠一帶は風光明媚なる上そこゝの名所古趾等が心行くまで旅人を慰めたのである。長崎奉行等の交替も和蘭人等の參府も多く此の街道を選んだと云ふ。

回顧する當時この險しかりし峠の彼方に連る長崎の都の物優しい抱擁と港の夜の偉觀とを、第一步の麓から未だ見ぬ目に髣髴と描きつゝ喘ぎ難路を攀づる旅人たちの心には强い愛着や懷かしい想像やそれとも初心な憧がれやらが映畫のやうに目まぐるしく胸を渦卷いたことであらう。

或は又驚異の瞳を見張りし儘長崎を後に鹿島立つ人達が

此の峠を越へんとする刹那必ずや最後に似た盡きせぬ名殘を惜しみつゝ貪る如く幾度か幾度か美しい都の姿を振り返つたことであらう。

實に此の峠こそ其の難と、其の險とそして此の峠の彼方に繪卷物のやうに展げてある長崎の都と、感慨は既に入り亂れて消へぬ名殘が當時旅人達の胸に如何程深く印したることどもよ。

二　名所古趾

『花ゆへと日見と思へばかちはたし』

『花の頃は長崎の男女の群が二里余の山路に袖をつらね、都人ありもろこし人ありて詩よ歌よとさまざまの糸竹のひびき、から人の酒盛花の鳥も驚くばかりにて唐土人の詩なども多かりしと』長崎夜話草に記されてあるを見れば此のほとり一帶も嘗ては櫻の名所として其の名をなしたこともうなづかれる。

尙往昔此の峠の頂きには櫻谷寺と言ふ寺があつて天正年中蠻人の齎らせる櫻の巨木があつたと傳說にあるも今は往時を偲ぶ影だにないことを悲しむ。

天正年間長崎氏對深堀氏と劍戟を交へたとき長崎氏は險峰數里に亘る此の峠を根城とし深城氏を惱まし竟にこれを敗つたと言ふ古戰場である。

日見峠の麓長崎市に入らんとする處に一ノ瀨川と言ふ溪流がある河畔にはさゝやかな一旗亭があるその名も床しい螢茶屋と言ふを

吉田重方なる人の道中日記中こゝら附近を記し寫すに

『日沒り果てぬ之より磴道を下ること十町余にして本河內村に至る人家少し見ゆ右の方に谷川あり此の邊より先二十町ばかりの間川岸に螢多し行く行く之を賞するに數百萬の螢飛び交ふ事たゞす風に亂るゝ柳絮の光あるが如く所としては甚だ濃く一團となるもありて目覺ましき有樣なるに

旅衣うさも忘れて夏むしの
すだく川邊に立ちとゞまりぬ

之れに依れば昔時此の附近一帶は螢の名所であつたこと

が容易に伺ひ知らるゝ。

螢茶屋と呼ばるゝ此の旗亭は昔時旅人たちの長崎へ入るさ、出るさ、に必ず小憩した所だといふ。

都々逸

送りましやうぞ送られませうぞ
せめて一ノ瀬あたりまで

螢茶屋での名殘の宴は賑かながらもさすがに名殘の惜まれてせきくる涙をさへつゝ

笠を手にもち皆さまさらば
長い御世話になりました

幾度か路傍に別れの盃を汲み交し汲み交しまだ仄暗い曉の星影の下に『さようなら』『またあいませう』と口々に交す幾組かの群が咽ぶ聲が早立ちの馬子衆の唄に鈴に織られた』云々情趣深き『シーン』が展開せられし杯とさる人の記念せしを其の儘に。

螢茶屋の稍々上手低部貯水池の畔『高部貯水池は明治十九年に工を起し同二十二年に竣工低部貯水池は降つて明治三十七年に成る』に花見塚、渡り鳥の發句塚唐銅塔お龜の

塔松島稻荷等がある（何れも改修國道に沿ふ）花見塚は老樹庄現櫻（今は枯死してなし）所在の地點で其の枯死する迄は春の花見に隨分な雜沓を極めた由である。

渡り鳥の發句塚は文化十年蕉門末流の人々によつて建てられたもので左の二句が刻まれてある。

めにかゝる雲やしばしの渡り鳥　翁
ふるさとも今やかりねや渡り鳥　落柿舍

お龜の塔は其の上手にある有名な長崎の鑄工龜女の手になつたもので之は享保六年七月二十八日洪水の爲め溺死者四十六名を出したる爲め當時長崎にあつた下野の木食僧淑玄等の發企で市人の喜捨を仰ぎ建設したものである。

唐銅塔は更に其の上手にあつて寛文二年痘瘡流行し斃れたもの三千三百餘人を數へたので長崎總町の名を以て法塔一基を建て無緣の菩提を懇ろに吊ふことゝなつたそれから無緣塔又は唐銅塔とも呼ぶ。

誰れがつけたか或る一部には八百屋お七の墓と言ふこれも記憶すべき事と思ふ。

其の傍に發句塚がある句に曰く

稲妻やをさまるもとのあればこそ　岱雲

更に其の附近に大寶塔（日蓮宗法塔）と言ふがある。

松島稲荷はこれより稍下手にある。

此の附近一帶は古來松風の里と呼ばれ風光絶佳の地である尙此の附近から秋月の前景として名高い容姿端麗山色明媚なる峨眉山（眉山、或は舞山又は彦山とも言ふ）が鮮やかに媚ひてゐる此の山に題する吟詠が澤山ある中にも人々に膾炙した彼の蜀山人の狂歌は此の山が謠はしたのである。

眉嶽の月を見て長崎の方言をつゞる　蜀山人

わりたちもみんな出て見ろ
　こんやこそ彦山やまの月のよかばい

長崎の山から出づる月はよか
　こんげん月はえつとなかばい

彼の名高い春德寺（トードスロスサントスと稱する切支丹宗總本山の跡此の寺よりは有名なる鐵翁禪師を出す寺内に芭蕉翁發句塚あり）城の古趾（一名鶴の城とも言ふ長崎甚左衞門居城の跡とも傳へらるゝこの城の古趾附近一帶には探るべき遺趾極めて多し）等もこれより下手數町の間にある。

轉じて再び日見峠を越へ殆んど其の中腹に到る路邊に彼の名高い去來の發句塚がある。

去來は人も知る蕉門關左の棟梁と稱せられ名譽の俳人である曾て鄕里長崎より再び京に上る時見送りの友卯七とか呼ぶ者に袂別の一句を殘した。

君が手もましるなるべし花すゝき　去來

天明四年長崎に於ける蕉門の人々此の句を石に刻んで此の袂別の地を紀念すべく塚を建てた之れを薄塚又は尾花塚ともいふ。

更に之れより里餘矢上村に至れば東房の潰と呼ぶ景勝地がある蠣道の梅林瀧の觀音等切を曳くべき絶景である。

東房之濱　井上圓了博士賦

矢上灣頭欲暮時　穩波清影海如池
浴餘一望皆呼快　想起山陽天草詩

瀧之觀音

樵路一條上又下　仙源深處尋僧舍
老樟横地自成門　飛瀑生風好銷夏

三　道路の變遷

『坂甚急峻馬に乘ること難し』と記されし日見峠の此の難路は長崎開港以後三百余年依然として舊態を保持し來つたのも縣令内海忠勝氏（明治十二年大阪の大書記官より來任）の時に至つて縣廳より低部水源地附近迄の道路改修をなしたるを濫腸として引續き日見峠の嶮路改修の儀起り本峠開鑿を目的として陸會社なる組合組織の會社の設立を見るに至つた（資本金二十萬圓社長山下佐一郎氏）此の會社の重役中には彼の維新の傑傑後藤象次郎氏の如き名士も加はつてゐたとは僞のやうな事實である。

此の開鑿工事は同會社の手に依りて直接なさず其の工費全部を縣に委托し工事を施行した（工事監督の任に當つた人は技師安場實道氏である）工事は明治十四年に完成を告げ、同年八月一日峠の絶頂に於て盛大なる落成式が擧げられた。

此の會社に依り工を了りしは螢茶屋附近を起點とし矢上の切通に至る區間延長二里二十七町餘で其の工費九萬圓餘を要したのである。

此の改修路こそ卽ち現在の道路で日見峠を中心として長崎側に一里十九町日見側に於て一里五十町直線式屈曲長崎側に六ケ所日見側に二十六ケ所平均勾配各二十分ノ一中央峠に於て十間餘山腹を切り下げ最高通過標高七五八尺長崎縣廳を起點とし矢上明治橋に至る將に三里十八町四十八間に及んだのである。

然るに陸會社に依り建造せられた新道路には通行者より所謂通行賃（橋錢に對し道錢とも言ふべきか）を徵收した（一人片道一錢牛馬五厘當時人夫一日の賃金十六錢餘）橋錢を徵せるの例は多きも所謂道錢なるものを徵收したのは寡聞で未だ之れを聞かず恐らく日本全國に於ける前後唯一の事例ならんか。

惟ふに此の會社の設立の目的は實にこの交通錢の徴收にありと言ふべく從而其の徴收の方法等も嚴密に行はれたと言ふ、當時この道錢を徴收した所謂關所とも言ふべきは一つは高部小源地の堰堤附近一つは日見側現改修工事の終點附近（俗稱梨木茶屋附近）の二ヶ所にて徴收したと傳ふ。

此の道錢制は明治十四年の開鑿當時より同二十二年迄殆んど九ヶ年に亘り繼續施行せられた。

明治二十年に至り縣令日下義雄氏に依り更に本路線に對する第二次の改修工事行はれ現女子師範學校横より螢茶屋迄を幅五間に開鑿（卽ち現在の道路）せり（工事監督技師吉村長作氏）然るに一方年と俱に交通は頻繁を加へ其の他四圍の狀況に鑑みる所ありて明治二十二年同縣令の手に依り前記陸會社に對し補償金交附せられ此に從來の道錢制度の撤廢を見るに至つたのである。

それから幾星霜陸會社の手に依りて成つた長蛇のうねり其の儘の新道路も其の當初に於ては關係氏多年の渴望に對する旱天の慈雨として迎へられもしたが、駸々乎として其の停止する處を知らない時勢の進運は年と共に雜沓を來し從而此の道路も後年非常に不便不利を痛感するに至つた。

然し其の工事の容易でないことを想うと皆一樣に手を縮めて傍觀するの外術なかつた、其の内に時代は刻々と變遷して遂に見るに忍びない狀態となつた。

玆に此の難路の大々的改修を企圖するに到つたのは大正五六年頃よりで關係部氏先驅となつて之れを絶叫し大正七年には矢上、喜々津、古賀、戸石、田結、江ノ浦等各町村村民聯合日見峠開鑿期成同盟會なるもの組織せられ同九年には之が測量費として金六百圓を縣に寄附するに至つた。

縣當局に於ては其の緊切急務なることは夙に之れを認め居たことゝて直ちに其の實測に取り懸つた其の大正八年の測量査定は長四百間幅三間餘の隧道を穿ち日見村綱場に於て現國道に接續せしむる計畫であつた。

時恰も道路法の實施を見るに到り且つ自動車の需要は著しく昂進し右の査定計畫では到底其の要求を滿す能はざる狀態となつたので更に再度の測量を實施するに至つた（其

の後多少の變更を加ふ）其の査定設計が卽ち現在の實施路線である隧道の長さ三百五十間餘幅四間高二十尺餘更に之れに接續して緩勾配を以て日見村綱場山腹を繞り矢上の字甲頭東房公園前にて現國道と連絡を採り羊腸たる坂路を改修するのであつて工事完成の曉に於ては現在鐵路を唯一の陸上機關として居る長崎市に於ては輸出入物資の運輸並に地方開發に至大の關係あるは勿論本縣產業の發展上影響する所尠からず其の他經濟上交通上一進面目を施し長崎市關係町村に灼々たる新生命を齎らすことであろう。

本改修工事は大正十年度より工を起し長崎市中川町縣農事試驗場附近より本河や貯水池に沿ひ隧道入口まで既に延長二十六丁餘の工事を大正十二年度迄に終へた、此の工費約二十六萬圓更に隧道工事費約六十萬圓を要し之れが貫通迄約七十六萬圓餘に達するのである。

尙本路線に對する改修工事は今後大正二十年頃迄全線に亘り逐年改修を加へらるゝ筈で、縣の豫算面に現はれたる數字に依れば其の總工費額實に百八十餘萬圓に達するのである宜なる哉、五十年前人夫賃十五錢內外の時二十萬圓を費したる本道改修工事を思へば現在約其の十倍に相當する額二百萬圓は寧ろ當然と言ふべきであらう。

嘗ては荊棘を別けて攀ぢ或は通道錢を要し將又三十六曲の小唄の語り草であつた往時の道路は宛然重なるが如き奇觀を呈し長崎人士の間にも比喩的俚諺として『日見峠が平ふなる』と言ふことは直ちに以て『インポッシブル』『ホープレッス』を意味せし程爾く難路難工事とせられた本峠一帶も玆數年を出ずして殆んど直線に近き坦々砥の如き道路と化し『日見峠が平ふなる』と言ふ言葉其の儘に實現せられ過去の難路は昔の夢物語りと封し去られるのであらう

惟ふに日見峠として靈あらば其の感慨や奈何ばかりか、終りに本編を物するや去る六月十九日午後〇時、彼方の光りと此方の光りが山底の中心部に於て渾身の力を集めた鶴嘴の一閃と共にパット合體したときの歡喜は創造の如き歡喜であつた。